

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：27301  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2012～2014  
 課題番号：24530217  
 研究課題名(和文) マルサス書簡から見たマルサスとヤング、ジェフリー、チャーマーズ、ヒューウェル  
  
 研究課題名(英文) Young, Jeffrey, Chalmers, Whewell from Malthus's Letters  
  
 研究代表者  
 柳田 芳伸 (Yanagita, Yoshinobu)  
  
 長崎県立大学・経済学部・教授  
  
 研究者番号：80239813  
  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)： まだ世界の各所に散在している未刊のマルサス書簡(Malthus, Thomas Robertが同時代人たちと遣り取りした書簡)のうちから精選し、それらを活字化し、翻訳した。その上でそれらの書簡の書面を手掛かりに、マルサスや同時代人たちの著作を読み直し、既存の研究に新生面を切り開こうと試みた。併せて、これまで知られることのなかったマルサスと同時代人たちとの知的親交の幾つかの足跡をも究明しえた。とりわけマルサスのパーネル、ホーナー、チャーマーズとの知的交流の墨痕を解明できたことは大きな成果といえよう。また42通に及ぶマルサス書簡を訳注を付し、翻訳しえたことも今後の研究にとって意義深いであろう。

研究成果の概要(英文)： In this research, we collected unpublished Malthus letters (letters that Thomas Robert Malthus exchanged with people of the same age) carefully from many places, printed them in type and translated them into Japanese. After that, we tried to open new aspects of existing researches by reading again the works of Malthus and people of the same age. By doing so, we could clear up unknown intellectual friendships between Malthus and people of the same age.

Above all, it is a great achievement that we could investigate the detail of Malthus's intellectual friendships with Parnell, Horner and Chalmers. In addition to that, it is significant for the following researches that we translated more than 40 letters of Malthus with notes.

研究分野：経済思想史

キーワード：マルサス ゴドウィン ヤング パーネル ホイットブレッド ホーナー チャーマーズ ヒューウェル

### 1. 研究開始当初の背景

オーストラリア在住のマルサス研究者プレン(Pullen, John, 1933-)によってその公刊が2004年に予告されたけれども、マルサス書簡集は依然として未刊行であった。その状況は基本的には今日も変わっていない。ケンブリッジのマーシャル文庫の一角にジェームズ女史(James, Patricia, 1917-87)が収集したマルサス書簡の束があるのみである。このことは実際や経験を重んじていたマルサスが同時代人たちとどのような知的交流を通して、『人口論』の改定作業等の知的営為をなしていったかの、あるいはまたマルサスと交流があった知識人たちの思索形成の過程の解明を困難にしていた。

### 2. 研究の目的

主要なイギリス古典派経済学者のうち、今日までにいまだ全集が刊行されていないのは、T. R.マルサスのみである。マルサスの著作集は1986年に刊行されているが、そこにはマルサスと同時代人達との間の書簡は一切収められてはいない。本研究は、マルサスがA.ヤング、F.ジェフリー、T.チャーマーズ、およびW.ヒューウェルたちと遣り取りした書簡の読解を手がかりにして、マルサスと彼らとの知的交流の軌跡を辿り、既存の研究を豊富化しようとする試みである。

### 3. 研究の方法

英国図書館、スコットランド国立図書館、エディンバラ大学ニューカレッジ、及びダービーシャー郡記録保管局に所蔵されているマルサス書簡を複写、入手する。これらのマルサス書簡の原文の複写を整理、分類し、それぞれの研究参加者が担当するものに仕分ける。その後、1年余りかけて、各々はマルサスがネピア(Napier, Macvey, 1776-1847)に宛てた書簡の原文の複写(1821-30年)と活字化されたものと対比しながら、判読、読解する。そしてそれぞれのこれまでの研究蓄積に基づきマルサスや同時代人たちの著作等を再検討していく。

### 4. 研究成果

本研究に参加した各自による個々の研究成果の概要のみを示しておこう。

中野 力「マルサス=ゴドウィン人口論争の一展開 マルサスのゴドウィン宛書簡(1798年8月20日)を中心に」では、ゴドウィンが1793年に出版した『政治的正義』からマルサスが1803年に出版した『人口論』第2版までの流れを考察しながら、マルサスからゴドウィンへの手紙が二人の議論にとってどのような意味を持つのかを論じる。ゴドウィンの『政治的正義』やマルサスの『人口論』は当然に重要な著作であるが、実のところ、その議論をつなぐものとして、マルサスからゴドウィン宛の手紙やゴドウィンの説教である『諸考察』も重要なものである。

しかしながら、手紙が議論の対象となることはほとんどなかったし、『諸考察』も十分に研究されたとは言いがたい。

ゴドウィンは『政治的正義』で平等社会について論じ、『研究者』で「貪欲と浪費について」を論じる。この「貪欲と浪費について」は特にマルサスに影響を与え、これによってマルサスは『人口論』初版を執筆するに至った。マルサスの『人口論』初版では平等社会と「貪欲と浪費について」の両方を批判する見解がみられる。

しかしながら、マルサスからゴドウィンへの手紙を読むと本質的な議論は等比数列的に増加する人口と等差数列的にしか増加しない食料との関係が本質的な問題であり、「貪欲と浪費について」の議論は、人口問題に比べると重要度が落ちるように述べられている。

この手紙の後に出版された『諸考察』で行われたマルサスへの反論で、ゴドウィンは人口理論について議論を展開しているが、「貪欲と浪費について」の議論については反論を展開していない。マルサスは『人口論』第2版ではこの議論を削除し、論争の焦点から外すこととなる。二人の議論で「貪欲と浪費について」が削除されるのは、手紙で展開された議論を考察することによって理解できるものである。

マルサスは『人口論』第2版で新たに道徳的抑制を付け加える。これはゴドウィンの影響を受けたものと考えられる。しかしながら、これは『人口論』初版で論じた予防的抑制に含まれるものでしかなく、人口抑制策として十全に役立つものではなかった。慎慮が人口抑制に役立つことに対しての疑いはすでに手紙でも見られたものであった。手紙では慎慮が人口抑制に役立つことに対して懐疑的であったマルサスは、『人口論』第2版でその議論を取り入れるものの、決してゴドウィンほどの役割を認めなかったのである。

柳田 芳伸「2版『人口論』書評以降のA.ヤングとマルサスとの知的交流」では、2版『人口論』(1803)を読んだヤングが『農業年報』第41巻239号(1804)に寄稿した「人口の諸原理を小屋に土地を付与する問題へ適用することについて」という論評を受けて、マルサスが3版『人口論』(1806)の付録の中でヤングの反論に批評を加えながらも、付帯条件付きでヤングの主張を受容していったことを検証する。また併せて、マルサスが1808年7月頃には失明に近い状態になっていたヤングに宛てた4通の書簡(1816-9)から2人の間でどのような知的交信がなされていたのかを解明している。

元来、救貧法の害悪を唱えていたヤングは1795年の食糧暴動を目撃したのを契機に、救貧に対して同調的になっていく。『平易に述べられた食糧不足問題と救済策』(1800)ではスピーナムランド制度に基づく救貧には反対しつつも、「3人以上の子供を持つ王国の

すべての農村労働者にジャガイモ用の半エーカーと、1~2頭の牝牛を飼育するに足る牧草を保証する」ような小土地割り当て案を提起した。マルサスは2版『人口論』においてこの提案を詳細に批評した。その主旨は、小土地割り当て案はイングランドの農業労働者をアイルランドの下層並みの貧困多産の窮状に陥らせるもの以外の何物でもないということであった。ヤングは1804年の書評の中で、性急な救貧法の撤廃を戒めつつ、小屋住み農が失った共有権の代償に自主的に小土地割り当てを受け入れていくのが望ましいと抗弁した。この反論に対して、マルサスは3版『人口論』において、あくまでも救貧法の全廃を前提としたうえではあるけれども、勤労階級の形成に合致する限りでヤングの小土地割り当て案に賛成した。この点はこれまでの研究では等閑にされてきた論点であろう。

また1810年代に両者の間で交わされた書簡からは、2人が農業保護主義者として共鳴し合っていたことが伝わってくる。例えば、マルサスは踏み鋤深耕という農業改良法についてヤングに問い合わせている。それは農作物の収量の増大をもたらすと同時に、農業労働の需要をも確保できるという農法であった。マルサスは、議会土地囲い込みによって熟練農業労働者が未熟練農業労働者へと転落していくことを余儀なくされ、加えて脱穀機による省力化がナポレオン戦争後の農業不況において一段と加速化していくという潮流の中で、農業労働者たちが可能な限り離農していかないような方策を模索していたと考えられるのである。

田中 育久男「救貧法改革におけるホイットブレッドとマルサスの交流」では、下院議員サミュエル・ホイットブレッド(Samuel Whitbread, 1764-1815)が1807年に下院に提出した救貧法改正法案をめぐる、マルサスが刊行した公開書簡とともに、これまでさほど脚光を浴びることのなかったホイットブレッドの返信をもとに、両者の救貧法論を考察する。18世紀後半より深刻化する貧困の拡大などを背景とするホイットブレッドの法案は、マルサスの思想的な影響を受けつつも、救貧法の部分的な修正を意図して、多岐にわたる提案がなされた。それは貧民の区別を基本としながら、彼らの自立心や節約心を刺激し、公的な救済を制限することを主旨としたものであり、書簡やパンフレット、雑誌などを通じて様々な思想家たちが論争を繰り広げた。

マルサスは『人口論』初版より一貫して救貧法の漸次的な廃止を唱えたが、書簡でもその見解に変更はなく、人口原理に基づき法案の検討を行った。一方、ホイットブレッドは書簡の中で、マルサスの人口原理を意識しつつも、南部諸州での深刻な困窮など、地域の現状を踏まえた上で救貧法改革を行おうとしたことを明かしている。しかし両者は、下

層階級的人格向上を共通の目標に掲げており、勤労や節儉を備える自立した人間を育成しようとする方針を共有していた。マルサスは法案に対し断固反対とすべき部分はあるとしながらも、提案の多くを容認しており、議会での救貧法改革に一定の理解を示していたと言える。

また、書簡での両者のやりとりは、「貧困と困窮」の区分や貧民の劣等処遇、中央集権的な救貧行政などの問題にも触れており、のちの救貧法改革や新救貧法の成立(1834年)につながる萌芽的な議論がなされていたことが明らかになる。往復書簡に見られるこうした事實は、1807年における救貧法論争を考察する第一歩につながるとともに、1817年に設置されたスタージェス・ボーン委員会の救貧法に関する報告にマルサスの思想的な影響を考察する先行研究を補強するものであると考える。

柳田 芳伸「マルサスとパーネル」では、マルサスとH.パーネルが1808年5月に取り交わした3通の書簡を分析し、その意味について考察している。

3通の書面の主たる話題は「アイルランドの十分の一税の制度とその改革案」である。およそ、マルサスが「十分の一税の代わりに全体の一定量の純地代を割り当てること」を提起したのに対して、パーネルの方は、それを実際に「アイルランドで実行することは不可能である」と返答し、年額30万ポンド弱に及ぶ十分の一税の代わりとして「大蔵省による聖職者への(貨幣)支払い」、ないしは「(十分の一税の取得権者による一部の)土地の代用」を提案している点に収縮できよう。別言するなら、マルサスはイングランドでは「一定量の純地代やそれに類する地代を...十分の一税の最良の代替物とみなす習慣」が定着しているので、それをアイルランドにも適用してはどうかと考えた、他方、アイルランドの実情に通曉したパーネルの方は、アイルランドの「あらゆる階層の人々は[事業こまごまとした仕事をする習慣には不慣れであり、かつまた、支払われるべき地代量の正当な割り当てのようなものを保証することもまたほぼ不可能」とみなした、こう言い換えよう。

荒井 智行「地金論争期におけるジェフリー、ホーナーとマルサス」では、『エディンバラ・レビュー』の編者であったフランシス・ジェフリーおよびフランシス・ホーナーと、マルサスとの「書簡」の考察を通じて、それらの論争の知られざる知的な営みを明らかにすることを目的とする。彼らの「書簡」の中には、これまで内外で発見されてこなかった、スコットランド国立図書館所蔵の「ホーナーからマルサスへの手紙」(1809年、6月6日)や同図書館所蔵の「マルサスからジェフリーへの手紙」(1811年4月7日)を利用している。

これらの「書簡」の研究の特徴は、マルサ

スを中心とする知的な交流を描き出すことにある。より具体的には、それらの論争の裏舞台で繰り広げられた論文投稿をめぐる細かな経緯や地金論争におけるマルサスのホーナーに与えた影響関係等についてである。地金論争におけるマルサスの貢献は、『エディンバラ・レビュー』に掲載された論文であると言われている。マルサスがこの『エディンバラ・レビュー』に投稿したのは、その当時、同誌の編集者であったジェフリーとホーナーによるマルサスへの熱心かつ巧みな論文投稿依頼があったからである。そして、こうしたジェフリーおよびホーナーとマルサスとの「書簡」のやり取りを通じて、特にホーナーは、マルサスと友好的な関係を築くようになる。

1800年代後半以降、ホーナーは、「書簡」を通じて、地金論争に関する自身の見解をマルサスに問いかけながら、地金や穀物貿易に関するマルサスの論考を学ぶようになる。そして、地金論争や自由貿易をめぐる議論について積極的に発言するようになる。イギリス議会において、これらの主題についてホーナーは演説することになるが、その背後にはマルサスとの綿密な打ち合わせがあったのではないかと窺わせる「書簡」も残されている。本稿では、地金論争において、地金主義や銀行の紙幣の過剰発行に対するホーナーの批判が、マルサスに与えた影響関係についても検討を加えている。

真鍋 智嗣「救貧法をめぐるマルサスとチャーマーズ」では、おおよそ次のようなことを検出、考察している。19世紀前半にスコットランドで活躍したチャーマーズ(Thomas Chalmers, 1780-1847)は聖職者や救貧活動の実践者として有名であるが、経済学者としての一面も持つ。以前は「マルサスの弟子」として単純に捉えられることが多かったチャーマーズであるが、近年は多面的な経済思想史上での捉え直しが進んでいる。その中で、両者に共通する点として、第一にチャーマーズがマルサスの人口理論の強い影響のもとに経済理論を構築していること、第二に一般的供給過剰論を展開したこと、第三にキリスト教思想との強い関連性があること、という3点が注目されてきた。

こうした両者の比較研究を深めていく上で、エディンバラ大学ニューカレッジに所蔵されているチャーマーズ宛マルサス書簡は注目される。全8通の書簡は、これまでの経済思想史研究においても部分的に引用されることはあったが、その全体像が十分に検討されることはなかった。そこで本研究では、8つの書簡の概要を明らかにするとともに、特に両者の共通の課題であった救貧問題に注目し、両者の経済思想の比較研究を行った。1820年代に書かれた3つの書簡を中心に検討した結果、両者の救貧思想の相違点が明らかになった。チャーマーズはあくまでも救貧法の廃止をめざし、教区内での相互扶助のシ

ステムを追究していった。ところがマルサスは、スコットランドでのチャーマーズの実践に希望を見出しつつも、次第にイングランドの現実に即して、より現実的な救貧法の運用上の改良を目指すことへ重点を置いていった。両者ともに、救貧問題を重要な経済的な問題として扱ったが、現実によって理論が妥協せざるを得なかったマルサスと、旺盛な活動力によって現実を変えることにこだわったチャーマーズの救貧思想には、大きな相違点があったという結論を得た。

山崎 好裕「マルサス植民政策論の態様と変遷：ウィルモット-ホートン宛マルサス書簡の調査から」では、大略、次のようなことが析出している。

経済学への反対者として知られていたサドラーに対して、ウィルモット-ホートンは経済学を背景にして移民政策を展開しようとしていた。議会植民委員会でもマルサスに有識者としての発言を依頼するなど、自身の植民政策を経済学によって正当化することに尽力した。ちょうどこの時期、ウィルモット-ホートンはマルサスと21通に及ぶ書簡を交わしており、それがダービーシャー郡記録保管局に保存されている。

マルサスの方も、ウィッグへの接近に失敗した後、ウィルモット-ホートンのような進歩的トーリーに自らの理論への支援を求めたことが考えられる。移民を巡る両者のやり取りにはお互いの利害の一致があったと思われるのである。

ウィルモット-ホートンとマルサスの相違は、理論的な相違ではなく現状認識の違いである。また、書簡からは、マルサスが、ウィルモット-ホートンの植民論にかなり親和的であるのに対して、ウェイクフィールドの植民論には明確に批判的なことがわかる。そして、ウェイクフィールドへの批判は実現可能性や費用の過大性といったことから来る批判というより、ある程度、体系的・理論的なものであった。

第8章 山崎 好裕「マルサスとケンブリッジ帰納論者：ヒューウェル宛マルサス書簡を通して」では、マルサスが1829年、1831年(2通)、1833年に渡ってヒューウェル(William Whewell, 1794-1866)に4通の書簡を送っていることに注目する。この書簡の内容は、ケンブリッジ帰納論者と呼ばれるヒューウェルとジョーンズ(Richard Jones, 1790-1855)の方法論との違いを通じて、マルサスのこの時期の方法論について詳細な情報を与えてくれるものである。

また、マルサスは1920年に出版した『経済学原理』を改定し、死後1936年に再出版されている。手紙のやり取りはこの間に行われており、1920年のマルサスと1936年のマルサスの間で大きな方法論上の変化があったかを考える際の資料となり得るものと思われる。

リカードウ派の演繹主義に関しては、マル

サスはヒューウェル、ジョーンズとともに批判的な立場を取っていることは間違いない。しかし、ヒューウェル、ジョーンズが、成熟した経済学が、ニュートン力学のような演繹的な体系となると考えていたのに対して、マルサスは帰納と演繹を相互に使いながら経済学を展開することを考えているのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

柳田芳伸・中野力「マルサスの H.パーネル、及び A.ヤング宛ての書簡」『長崎県立大学経済学部論集』第 47 巻第 4 号(2014 年 3 月), pp.101-32.

柳田芳伸「マルサスとパーネル：アイルランドの十分の一税制度の改革と関連して」『長崎県立大学経済学部論集』第 48 巻第 1 号(2014 年 6 月), pp.1-21.

柳田芳伸「2 版『人口論』書評以降の A.ヤングとマルサスとの知的交流」『長崎県立大学経済学部論集』第 48 巻第 3 号(2014 年 12 月), pp.1-33.

山崎好裕「マルサスからヒューウェルへの 4 通の書簡」『福岡大学経済学論叢』第 56 巻第 3・4 号(2012 年 3 月), pp.311-25.

山崎好裕「マルサスからホーナーへの 5 通の書簡」『福岡大学経済学論叢』第 57 巻第 3・4 号(2013 年 3 月), pp.125-40.

山崎好裕「マルサス植民政策論の態様と変ウィルモット-ホートン宛マルサス書簡の調査から」『マルサス学会年報』第 21 号(2014 年 3 月), pp.35-56.

[学会発表](計 2 件)

山崎好裕「ウィルモット-ホートン宛てマルサス書簡から見えてくるもの」マルサス学会第 23 回大会(2013 年 6 月 30 日)

経済学史学会第 79 回全国大会(2015 年 5 月 31 日) セッション報告:「マルサス書簡の中の知的交流」(代表者:柳田芳伸、報告者:中野力、柳田芳伸、荒井智行、真鍋智嗣、山崎好裕)

[図書](計 1 件)2016 年 4 月、昭和堂より柳田芳伸・山崎好裕編『マルサス書簡の中の知的交流』として刊行する予定。

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

柳田 芳伸 (YANAGITA, Yoshinobu)  
長崎県立大学・経済学部・教授  
研究者番号: 80239813

##### (2)研究分担者

山崎 好裕 (YAMAZAKI, Yoshihiro)  
福岡大学・経済学部・教授  
研究者番号: 90268970

##### (3)共同研究者

荒井 智行 (ARAI, Tomoyuki)  
研究者番号: 70634103

中野 力 (NAKANO, Tsutomu)  
研究者番号: 60764173

真鍋 智嗣 (MANABE, Tomotsugu)  
研究者番号: 80764175

田中 育久男 (TANAKA, Ikuo)  
研究者番号: 50764172